新見公立大学紀要　第37巻
pp. 131－137，2016

報告

住民主体でなされる地域活性化と高齢者見守り活動

－新見市高尾長寿クラブの活動から－

岡　京子*・松本　百合美・大竹　晴佳

新見公立短期大学地域福祉学科

（2016年11月30日受理）

新見市高尾地区において元気高齢者が中心となり，地域の活性化と高齢者の見守り活動を着実に実践していることに注目し，活動のリーダー的人物への聞き取り調査と地域の資料から，それらを可能にする要因について考察した。公民館を中心として1km範囲に生活圏があるという恵まれた地勢に加え，古くからの強い紐帯で結ばれた住民が壮年期から「若連中」，次いで「連合町内会」に参加し，年代を経るとともに「老人クラブ」へ活動の場を移していくといった形が見えた。現役世代から高齢者に至るまで，連合町内会を中心として緩やかに繋がりながら連携することで活発な活動が展開できていたことが明らかになった。さらに今後，地域福祉専門職の視点を加えることで，より活動の質が上がり住民の安心につながることが示唆された。

（キーワード）地域活性化，老人クラブ，町内会，配食サービス，見守り活動

1．はじめに

本稿は，新見市高尾地区において元気高齢者が中心となり，地域の活性化と高齢者の見守り活動を着実に実践していることに注目し，それらを可能にする要因について考察することを目的としている。

現在，少子高齢化の進んだ日本において，人々が要介護状態になっても可能な限り住み慣れた地域や自宅で生活し続け，人生最後のときまで自分らしく生きることを目指して，「地域包括ケアシステム」の構築がすすめられている。介護保険制度の役割と地域社会の在り方，さらに医療や住居，家族や地域住民の支えあいといった側面から，地域包括ケアの論点を浮き彫りにした「『地域包括ケア研究会』報告書～今後の検討のための論点整理～」（2009）においては，地域包括ケアの提供にあたっては，それぞれの地域が持つ「自助・互助・共助・公助」の役割分担を踏まえた上で，自助を基本としながら互助・共助・公助の順で取り組むことが提案されている[注1)]。中でも，「互助」については，ソーシャルサポートがあることが高齢者のうつ状態の予防因子であることや，地域活動やボランティア活動を行っている高齢者に認知症や要介護の発生率が低いこと等を根拠に，「互助の重要性を認識し，互助を推進する取り組みを進めるべきである」と，その有用性について強く提言されている。

互助を構成する近隣の助け合いという側面では，戦後日本の産業化や都市化の流れの中で近隣社会の解体傾向が進み，特に都市部においては住民間の相互扶助意識が低いと言われている。本学の所在地である岡山県新見市は，人口減少と高齢化の進む中山間地域に位置しており，近年，1年に1～2％の人口減が続き，2015（平成27）年10月1日現在の高齢化率は38.4％（岡山県28.6％）である。山陽と山陰を結ぶJR伯備線や国道180号線と，兵庫県姫路市から岡山・広島の県北を通り広島市に至るJR姫新線・芸備線の交差地でもあり，新見市内でも国道180号線沿いの新見，高尾，西方，正田，上市といった地域は市街地で勤務する人の居住地として人口流入が進み，周辺地域は一層の人口減と高齢化が進むといった状況がある。

中山間地でありながら，新住民を多く迎えている高尾地区において，高尾学区連合町内会と高齢者の互助組織である高尾長寿クラブが連動しながら，地域の活性化と高齢者の見守り活動を行っていることを紹介するとともにその成功の要因を考えることは，今後の地域包括ケアシステムの実現に寄与する一考ではないだろうか。今回は，「住民ボランティア活動」「自治会活動」「NPO活動」といった活動が「住民が主体となって行う活動」であるとの認識のもと，新見市高尾地区でなされている地域活性化活動や高齢者見守り活動について，その活動と，それを可能にしている要因についてみていく。

2．調査の概要

以下の考察では，地域活動のリーダー的存在であるA氏の語りを中心に論じていく。聞き取りは，2015年9月にA氏の自宅で行った。聞き取りに先立って，調査データの取り

*連絡先：岡京子　新見公立短期大学地域福祉学科　718-8585　新見市西方1263-2

扱いやプライバシーの保護等に関する説明を行い，許可を得た上でICレコーダーによる録音後，逐語録を作成した。聞き取りは半構造化面接とし，高尾長寿クラブの活動と地区に対するA氏の想いを中心に自由に語っていただいた。本稿ではこの逐語録を主なデータとして用いたが，高尾公民館30周年記念誌，高尾学区連合町内会機関紙，高尾長寿クラブ総会資料，高尾小学校記念誌といった地区の資料と，2015年度に高尾学区連合町内会と本学で共同事業を行うにあたって参加させていただいた会合等で作成したフィールドノーツも使用している。なお，論考を発表するにあたり，A氏ならびに連合町内会長に原稿を読んでいただき，発表の許可をいただいた。

本論の主たるインフォーマントであるA氏は，80代の男性である。新見市高尾地区で生まれ育ち，地方公務員として勤務していた50代から高尾学区連合町内会活動にかかわり，定年退職後，連合町内会会長として10余年，また地区老人クラブである高尾長寿クラブの事務局長・会長としてもその活動に力を注ぎ，現在も活動的かつ積極的に地域に貢献している人である。

3．強い紐帯と地域の変容

A氏が「うちの地区」という場合，多くは高尾小学校区を指している。大字高尾の半分程度の地区であり，南は新見第一中学校の正門前の道路，西は高梁川，北は鼓橋交差点付近という高尾谷から高梁川にかけて広がった地域である。地域活動の拠点となる高尾公民館を中心に，1 km程度の徒歩圏内に生活圏が展開している。かつては，共有山林を持つ85戸の家が山の管理も兼ね，地域共同体を形成していたとのことである[注2)]。小学校は1977（昭和52）年の独立まで新見地区にある思誠小学校の分校で，5年生になると本校へ通学し始めるといった形をとっていた[注3)]。戦後の農業の機械化とともに，周辺中山間地域から農家の次男・三男といった労働力が市街地へ自宅を構えるに至り，地区の人口が増え田畑の宅地化が進んだ。2016（平成28）年8月末の統計では，大字高尾地区は新見市内でも2番目に人口が多く，その高齢化率は，新見市全体の39.4％に比し，33.1％である[注4)]。

A氏はかつての町内会がいかに強い紐帯を持った共同体であったかということ，また人口がいかに増えたかということについて，以下のように語っている。

> 昔はねえ「高尾85戸」ゆうねてぇ、共有山の所有者が85戸あるんですよ。町内会即、山の管理者。役員も同じようなメンバーで、大体一緒になってねえ。ちょうど地域的にまとまって。公民館から上・下みな1キロ以内にあるんですから、ですから歩いて行かれるんだからねえ。
>
> ほんま近いんじゃ。
>
> （住民の数について）今は、昔の5倍くらいかなあ。アパート入れたら400戸近くあるでしょう。

かつては山の共有者が町内会を形成し，山の管理と町内会運営はほぼ同一の組織で行うことができていた。地域的にまとまっていることもあり，その結束の強さは「高尾85戸」と称されるほどであったが，現在では当時の5倍にあたる住民が暮らすようになったとのことである。では，そのように人口が膨れ上がったことは地域にどのような変化をもたらしたのであろうか。

4．公民館と連合町内会による交流の場づくり

高尾地区では，1984（昭和59）年5月に新見市で14番目にあたる公民館が建設された。それを契機に高尾学区連合町内会の設立，高尾婦人会の復活，スポーツ少年団の設立等，公民館を利用して活動する団体・グループが次々と誕生した[1)]。1985（昭和60）年9月の連合町内会設立時に，A氏は50才であったが総務部副部長として役員の一角を担い，自身の定年退職後は会長に就任し，10年間会長職にあってリーダーシップを発揮した。

> （新しい団地には）表札がない。（町内会の書類を）持っていくんですよ。ほじゃけど名前書いてないし、隣の人に聞いても分からんから、持って帰って郵便にするんですわ。郵便にすれば届くんですわ。いっぺん、郵便屋さんが間違えて。（誤配された郵便物を、該当の家まで）取りに行って「すいません」ゆうて断りしたりして・・、難しい時代になりました。

近隣に新しい団地ができるが表札がないため，書類を持参しても目的の家にたどり着けず，持ち帰って郵便で出したというエピソードである。

> （こんなに人が入ってくるということは）嬉しいいうこともあるしねぇ。なかなか親睦図るとか、難しい時代になってしもうてねえ。
>
> 毎年運動会しながら、親睦を図るということをやっとんですけどねえ。地域を発展させていかないけんからなぁ。それにはやっぱり事業する以外にはないわねえ。家に閉じこもっておってはなにもできんからねえ。初めは文化祭でも、文化展じゃった。そしたら興味のある人は出てくるけど、ほかの人は出てこん。で、売ることと買うことをしようやゆうて、バザーと販売コーナーを設けようやゆうて。そうしたらようけ集まりだした・・。
>
> （事業を通して）顔見知りにならんといけん。挨拶

もせんような地域じゃあ、駄目だが。

地域の親睦を図るということは，地域の発展とも関連することであり，そのためには住民が顔見知りになるきっかけとなる「事業」を行うことが有効だという語りである。その一例として，「運動会」に加え，連合町内会発足の翌年から「市民文化展」を開催しているが，5年目の1990（平成2）年からは文化展を「文化祭」と改称し，即売・バザーを始めたところ住民の参加が増えたと語られた。資料によると第1回文化展では，出品者50余名，出品点数100余点であったものが，第28回文化祭（2013）では，即売，バザーに加え，福引き，ビンゴゲーム，餅なげ等も加わり参加者450人を計上している。

「事業をする以外にはない」というA氏の説明通り，高尾学区連合町内会は発足後3年目の1994（平成6）年から，15年間にわたって「ふるさと元気推進事業」「県地域活動支援事業」「地域コミュニティ支援事業」「市生き活きコミュニティ支援事業」ほかの事業に取り組み，国際交流会，料理教室ほか講習会，他地域活動視察などを活発に行っている。その活動は外部からの高評価も受け，「燃えろ岡山県民運動」（1995年度），「岡山県明るい県民運動」（1998年度）等において表彰されることもあった。住民対象の講習会は数多く開催されていたが，なかでも本稿が注目している料理教室に関しては，1995（平成7）年に初めて男性向けの料理教室を開催したのち，ほぼ年に数回の頻度で連合町内会の事業として，また公民館主催事業や長寿クラブの活動として，健康講話や魚の捌き方教室なども織り交ぜながら現在まで継続している。A氏は男性料理教室について，以下のように語っている。

年を取ったら核家族になるから、高齢になっても調理せないけん。女性が病気になった時には男性がやらな駄目じゃからな。

昔はあぁゆう機会（皆で集まっての会食）があったんですけどね。牛を飼っとって牧柵を直したり、道路直したりねえ。その後必ず慰労会じゃあゆうてね、みんな1杯飲みよった。昔は葬儀やこう部落で一緒にしよったでしょ。今は全然顔見合わすことがない。やからもう、どんどんバラバラ・・。

（スーパーで扱う）魚は調理しとるからものすごく高い。1切れの刺身が50円も60円も。僕らは10円で食う。自分で捌いたらなあ。

高齢になっても自分で料理ができるということは，健康面のみならず経済面でも生活を安定させることにつながる。料理教室でつくったものを皆で会食するのは，共同作業後の人と人との絆づくりに近いものがあるという語りである。

A氏は，2005（平成17）年に連合町内会会長を務めるかたわら，高尾長寿クラブで行う料理教室に配食を加え，在宅で過ごす高齢者への見守り活動を始めた。

5．高尾長寿クラブによる配食サービス

高尾長寿クラブは，創設が1955（昭和30）年の高尾地区における老人クラブの名称である。老人クラブは老人福祉法に定められた，60歳以上の人による地域を基盤とする高齢者の自主組織である。A氏は以下のように高尾長寿クラブを紹介した。

長寿クラブのメンバーは、昔からおる人が中心。新しい人もなんぼうかはおる。（地区には）60歳以上が390人くらいはいるが、だいたい200人が入っている。うちらの部落は90%の加入率。会費500円。よそは1000円から1500円ですよ。新見市の老人クラブの中では、まぁ一番大きいですわねぇ。

やはり，老人クラブにおいても昔からのつながりは強い。会費を安く抑えることで入りやすいクラブにし加入率を上げる努力をしている。高尾長寿クラブにおいては，満85才以上であること，または介護を要する状態になることで会費を免除するという内規がある。一緒に活動できないのに会費をもらうのは心苦しいとの配慮だということである。そういった在宅で過ごす要介護高齢者等を対象にしたのが，高尾長寿クラブによる配食サービスである。

これは，配食サービスとして始まったものではなく，前述したように頻繁に開催される料理教室から派生した活動である。

10人前するのも20人前するのも一緒だから、一緒にして希望者へ配ろう・・ゆうて始めたんです。地域の人も一緒に配ってあげようやと、我々が作ったものを。はじめは（年に）4回したんかなあ。

自分らも楽しいし。みんなで集まって絆を深めるゆうんかなあ。それを楽しみにしとる人もある。あまり他の人とは交流せんゆう人やこうもねえ。月1回のを楽しみにして出てきてくれよる人もおるし。つくる人は250円払って、もらう人は100円。（配食後の会食で酒を）飲む人は50円負担を増やしたんですよ。

年度当初の長寿クラブ内回覧板で，年間の注文を取る。対象者は75歳以上の高齢者のみの世帯か独居高齢者である。また，同回覧板では料理教室の参加者も同時に募集する。料理作りは健康づくりであり，認知症予防にもつながるというのがそのキャッチコピーだ。年間10回開催し，その都度のメニューは，A氏が立てる。カロリーや栄養バラ

ンスを計算し，食物繊維を多く，また旬の食材を使うことと自宅で野菜栽培をしている参加者からの材料の持ちよりも計画し，なるべく経費がかからないようにする。弁当のおかずは6品をつくる。目先の変わったもの，食欲をそそりそうなメニューを意識して考えるとのことであった。

> はじめは無料にしたんですけど、やっぱりあの、ご機嫌伺いゆうんですか、相手が病気だったりしたら困るんですよ。あの、タダにすると「おいそこに、玄関に置いといてくれ」ゆうて、寝とっても言われるでしょ。でも金の受け渡しをするゆうことなら、必ず出てこられるから顔色がわかるし、話もできるから。まぁいつも言うとるんですけど。渡すだけじゃなしに、体がどうかとか聞いて返してくれ言うとんです。何もなしに行く・・ゆうのはいけんけぇ、弁当持って行けばねえ。
>
> 「安いけぇ申し訳ない」ゆうて、いらんゆう人もおったんですけどねぇ。「気の毒だから」ゆうて。「いや、そういうことじゃない」ゆうて。「会でやる」ゆうて「そういうのでやってない。そういう心配はあんたが個人でせんでもいい」ゆうて、笑ってもらいよんです。

料理教室の日は，9時のスーパーの開店を待って買い出しに行く。スーパーの魚売り場ではすでに捌かれた魚が高値で扱われるので，捌く前の魚を仕入れておくようわざわざ前もって注文しておくとのことであった。10時に参加者は公民館の調理室に集合し調理が始まる。A氏の作ったレシピに沿って調理は進み，11時頃には弁当が出来上がるので，参加者で手分けをして5～6ルートに分かれ2人一組で配食に出かける。上記の語りは，その配食先で相手の顔を見て話をして帰ってくるということが大切であり，弁当をもらう側からすれば100円では申し訳ないと言われることもあるが，長寿クラブとしての活動だから心配しないでほしい・・と話して笑い話にする，というものである。

参加者の中には調理は苦手という人もいるが，弁当容器に詰めることだったり，配送することだったりと，その人が無理なくできる形で参加している。配食後は公民館へ戻り，配食先の様子を報告しあいながら，できあがった料理で会食をし希望者はお酒も楽しむ。

2015（平成27）年度は，4月と1月を除く月に1回ずつ計10回開催し，一回当たりの参加者17～19人で配食希望者28人の弁当を作成した。

6．1食100円がなぜ可能なのか

ここまで紹介したように，料理教室に参加する人は1回250円，配食を受け取る人は1食100円である。参加者にとって経済的負担が小さいということも，事業継続の大きな要因になっていることと推察できるが，その資金的裏付けについて2015（平成27）年度高尾長寿クラブ定期総会資料から見ていこう。

料理教室・配食については，材料費18万円が年間支出予算として計上されている。決算額は19万円余であったが，これが食材や弁当パック等に使われている。教室1回あたり1.9万円程度の予算であり，さらに参加者・配食数で除すると1食400円余りとなる。材料費18万円が予算として組まれる背景には，料理教室の参加者の自己負担が約7.5万円，「作業収入」10万円余という財源がある。これは，公民館祭り等での野菜の販売と，年に4回の廃品回収が1回2万円程度の収入になっているというものである。

A氏が地域の発展のためには「事業をするしかない」と語っていたように，高尾長寿クラブにおいては，「作業収入」10万円余のほかに「受託収入」4.3万円という収入としての予算がある。高尾公園の清掃作業を連合町内会から受託しているものであり，市の補助金だけに頼らない独自収入を持つ努力をしている。こういった財源が，安価での料理教室参加と配食の受け取りというサービスを支える背景になっていた。

> まぁ予算的にどうにもならにゃ、150円とか200円とかせにゃいけんけど、今のところはまかないができとるんです。弁当は大変手がかかるけどなぁ、みんな協力してくださるけえ。
>
> 昔は時間かかりよったけどねぇ、だんだん慣れるから、今頃は1時間半ほどで手のかかるもんもするけんなぁ。

町内での継続的な料理教室や，魚の捌き方教室の成果と，A氏の予算内で栄養バランスを考えた献立作成，さらには参加者の野菜の持ちよりや，手間を惜しまない弁当配達への参加によって，参加者も料理の腕を上げ，また美味しく楽しい会食の機会が月に一度可能になっているということであろう。

米を一食当たり70g炊き，副食を6品入れた弁当は高齢者にとっては2食分になるという。特に在宅で過ごす活動性の低下した人たちからは，「2食助かる」と言って喜ばれている。知り合いの畑で収穫した野菜に，友人たちが作ってくれた配食弁当は受け取る高齢者のみならず，その離れた家族からも感謝の言葉を貰うことが多い。そういった言葉は，また参加者の喜びとして力になっていることがうかがえる。

7．次世代への引継ぎとA氏の気がかり

これまで紹介したようにA氏は活動的かつ豊かな着想

を持った人である。そんなA氏も地域を作り上げてきた先輩の事業を継承し，発展させることを大切にしてきた。また，A氏世代が始めた事業についても，時代に応じたやり方で地域の後輩世代が引き継いでいる。高尾公園で行われる「とんどまつり」での豚汁のもてなしは，連合町内会婦人部によって引き継がれているし，文化祭での模擬店には高尾小学校PTAとして小学生の親世代が出店している。

また，2016（平成28）年3月に高尾学区連合町内会と本学地域福祉学科とで行った認知症所在不明者捜索訓練においては，連合町内会役員20数人の参加があったが，30～50歳代とみられる若い世代の役員が積極的にかかわり発言される場面がみられた。高尾学区では，古くから若者組織である「若連中」が組織されているが，彼ら自身の多くが小学校PTAに属する世代であり，その会合に「大先輩」として連合町内会の重鎮が参加したりすることもある。若連中のメンバーが，卒業後連合町内会の役員を担うといった状況は，かつての日本の村落においては当たり前のことであったが，その若連中に新規参入の住民たちが合流し，小学校PTAといった活動を行っているのが現在の高尾学区であろう。

高尾学区連合町内会の行事として行った認知症所在不明者捜索訓練においては，連合町内会役員の訓練への参加のほか，「日常生活を通常通り送る中でちょっと窓から外を見ていただきたい」というお願いのもと，若連中の方々にSNSを用いて所在不明者が自宅周辺を歩いていないか見て知らせていただく，という試みを同時に行った。顔を合わせての協働作業ではないが，そういった連合町内会行事にかかわったことで，「今後地域活動へ参加するハードルが少し下がった」という若連中メンバーの感想も聞くことができた。若連中や小学校PTAと長寿クラブといった世代の違う組織が，連合町内会を通して緩やかなつながりを形成している。そのつながりの中心となる連合町内会の活発な活動が，様々な世代や立場の地域住民の求心力となって地域づくりに繋がっているのではないだろうか。

最後にA氏の「気がかり」について3点触れておく。1点目は配食弁当を受け取る人の制限についてである。

> 困るんじゃ。子どもがおったらいけん。孫もおってもいけんし。それを判定するのが。もうおったら駄目じゃいうことにしとかんと、切りがないしねえ。

子どもや孫が同居している高齢者については，配食の対象外としているが，昨今親の年金で生活する単身子の問題などがメディアで取り上げられているように，地区内でも線引きの難しい事例がある。「子どもがおるばぁに（弁当を）貰えんのがおる」のだが，「歯止め」を効かせなければサービスは成り立たないので，単身世帯か高齢者夫婦世帯かという明確な一線を引かざるを得ないという状況があると語られた。本当に必要な人に支援が届いていないかもしれないという懸念であろう。

2点目は高尾長寿クラブの入会率が伸びないことである。前述したように高尾長寿クラブの会員は「昔からおる人が中心。新しい人もなんぼうかはおる」状態である。したがって，長寿クラブ会員を対象とした料理教室には，クラブ会員以外は参加できないし配食を注文することもできない。また，長寿クラブ会員であっても本人が注文しない限りは，配食弁当を届けることができない。

> （長寿クラブに）だいぶ誘ったんだけど、僕らも。なかなか途中から入るのが大変らしいですわ。若い時から入るのはみやすい（筆者注：入りやすいの意）けどなぁ。
>
> （認知症とか体が不自由で、自宅にいても注文をしない人もいる）任意ですからねえ。強制的に持って行くわけにもいかんし。

せっかく長寿クラブの活動を通して地域住民の交流を図っているのに，クラブへの入会率が上がらないこと，またクラブ員でありながら配食弁当を注文しないままの人がいることへの懸念である。A氏自身が「若い時から入るのはみやすいけどなぁ」と語っているように，単に支援を受ける側として入会するのは気が引ける。自分なりの役割をもって地域に貢献できるという状態で入会するきっかけが必要かもしれない。また，クラブメンバーであるにも関わらず，弁当を注文しないという遠慮が存在するならば，それもやはりそれまでクラブに貢献してきたかという自問の結果と言えるのではないだろうか。

3点目の「気がかり」とは，地域で活動する「よその組織との関係」である。具体的には長寿クラブは年に4回の廃品回収を大きな作業収入として，活動資金に充てている。しかし，高尾小学校が8月に廃品回収をするので，長寿クラブは8月を避け6月と10月に行っている。地域の様子を見ると，各家庭で廃品回収に出すための空ペットボトルやビール缶の置き場に困っているように見えるのだが，長寿クラブが廃品回収の機会を増やすと，学校へ迷惑がかかるのではないだろうかという懸念であり，「学校へ迷惑をかけちゃあいけん」のである。

8．考察

新見市高尾地区で地域づくり活動を担ってきたA氏の語りを中心に，活発な地域活動と高齢者見守り活動を可能にしている要因について考えてきた。

語りの中でA氏が繰り返した言葉がある。それは，「だーれもしてくれんから，自分がせないけん」である。地域住民であるA氏は自分のこととして地域を考え，強い紐帯

の中で様々な事業を仲間とともに作り上げてきた。50代という働き盛りの時期に連合町内会が発足し役員として参加したことは，仕事に取り組む熱心さで地域のことを考え行動するという生活様式を，定年後においても継続させた一つの大きな要因ではないかと考える。これまで見てきたように，高齢になって，自らが支援を必要とするようになってから地域組織に参加することは気兼ねでありそのハードルを高くする。住民が現役世代から地域活動に参画することが，地域活動を活発にする一つのヒントかもしれない。このことは，高尾学区に現在ある「若連中」「連合町内会」「長寿クラブ」の緩やかな連なりが維持できれば，今後も継続できるものと考えられる。

また，新見市高尾地区の恵まれた地勢も大きく影響している。活動の拠点である公民館を挟んで1キロの間に生活圏があるということは，地域活動そのものを行いやすくする大前提である。中山間地の特性として高齢になっても自家用車の運転で外出をすることが多いが，自家用車に乗らずとも自力で移動可能な生活圏域であることは理想的である。

最後に，このように意欲的で活発な地域への専門職の関わりについて提案したい。1985（昭和60）年に学区連合町内会が発足したのち，1991（平成3）年に高尾学区各種団体連絡協議会が発足した。公民館，連合町内会，防犯組合連合会，長寿クラブ，婦人会，若連中，高尾小PTAの7団体で構成された団体である。その後，連合町内会や長寿クラブが活発な活動をする一方で，婦人会が解散している。連合町内会の女性部としての活動に集約された状況であろうか。また高尾学区では，地区社会福祉協議会は立ち上がっていない。狭い学区であるため，各種の団体が林立するよりも連合町内会といった組織が包括的に地域の互助を担っている形であろう。しかし，そこに地域福祉支援の専門家の視点が加わったらどうだろうか。A氏の懸念である「子どもがおるばぁに（弁当を）貰えん」人，「なかなか途中から入るのが大変らしい」人，「よその組織との関係」といった点に何らかの変化を起こすことが可能になるのではないだろうか。

国立社会保障・人口問題研究所が2013年1月の推計として発表した「日本の世帯数の将来推計」によると，かつて一般世帯総数の40％以上を占める主要な類型であった「夫婦と子から成る世帯」に代わって，今後増加するのは「単独世帯」であり「ひとり親と子から成る世帯」である[2)]。推計結果から試算すると，団塊の世代が後期高齢者になる2025（平成37）年には，世帯主が75歳以上の世帯は全世帯数の22.6％を占める。さらに，世帯類型を見てみると「単独世帯」では全世帯数の24.0％，「夫婦のみ世帯」であれば33.8％において世帯主が75歳以上であり，「ひとり親と子から成る世帯」で世帯主75歳以上の割合は，21.8％という結果になる[注5)]。

家族形態が大きく変化している現代にあって，そういった家族が生活する地域も変容し続けているはずである。多くの時間を地域で過ごす高齢者同士の見守り活動は重要である。しかし一方で，地域包括ケアシステムの実現のためには，住民の持つ互助機能を強化する支援，一部代行する支援も必要ではないだろうか。

地域住民による互助活動が盛んな新見市高尾地区において，A氏の語りを中心に活動を活発化させる要因について考えた。人的要素と地勢的要素の2つが明らかになったが，地域住民主体の活動に専門職の視点を加えることで，より活動の質が上がり住民の安心につながるのではないかということが示唆された。今後とも同地域の活動を見ていくとともに他地域での取組等についても考えてみたい。

謝辞

私たちのインタビューに快く応じてくださったA氏，ならびに学区連合町内会の皆さま，高尾学区新見公立短期大学学生との交流を考える会の皆さま，皆さまの常に前向きで温かいご協力に心より感謝いたします。

注１）ここでは，「自助」は，「自ら働いて，または自らの年金収入等により，自らの生活を支え，自らの健康は自ら維持すること」であり，「互助」は，「インフォーマルな相互扶助。例えば，近隣の助け合いやボランティア等」。さらに「共助」は，「社会保険のような制度化された相互扶助」，「公助」は，「自助・互助・共助では対応できない困窮等の状況に対し，所得や生活水準・家庭状況等の受給要件を定めた上で必要な生活保障を行う社会福祉等」と定義されている。こののち2016年の報告書では，それまで「専門的サービス」と位置付けていた「予防」を，「介護予防・生活支援」として専門職サービスの機能を十分発揮する前提に位置づけなおした。それは，専門職の関わりを受けながらも，その中心は自助と互助の取り組みであるという説明である。一層「互助」への期待と要請が大きくなっているといえよう。

注２）高尾小学校校舎改築記念誌『たかお』（1989）によると，1695（元禄8）年ごろに編纂された『元禄検地帳』に，すでに「高尾村約八十戸」の記録がみられる。その後，1855（安政2）年の『宗門改人数寄目録』でも「高尾村の戸数九十九戸，人口四百三十四人」との記述がみられる。1873（明治6）年には，「高尾地区の共有林の一部を売却し，その代金七両一分をもって往時の寺子屋の跡地，通称『学校屋敷』に高尾小学校の設立を画す」との記述があることから，山林は古くから地区の財産として，住民の強い紐帯によって維持・管理されてきたことがうかがえる。

注３）前述の記念誌『たかお』には，各年代の卒業生の寄稿が掲載されている。高尾分校の低学年生が式典や運動会といった行事の際に，片道1時間ほどかけてたった一講時のために思誠小学校に通ったこと，その際も本校の都合に合わせて時間設定がなされたり，本校の各学級の数合わせのために分校の生徒がバラバラに分けられたりして辛かったことなどが述懐されている。こういった思い出は否応なく分校の生徒の心理的凝集性を高め，強い仲間意識を形作っていったものと推測できる。

注４）新見市「大字別年代別人口集計一覧表」2016（平成28）年8月31日現在による。

注５）国立社会保障・人口問題研究所は，5年ごとに「日本の世帯数の将来推計」を実施しており，2013年1月推計として発表されているものは，2010年の国勢調査に基づく推計である。本稿では，表2「家族類型別一般世帯数および割合」と表3「世帯主65歳以上・75歳以上の世帯の家族類型別世帯数,割合（2010～2035年）」及び，結果表2「世帯の家族類型別,世帯主の男女年齢5歳階級別一般世帯数および割合,2025（平成37）年」に示された数値を用いて，世帯主75歳以上の世帯類型別の割合を計算した。

文献

１） 新見市立高尾公民館運営協議会：新見市立高尾公民館30周年記念誌，2，2015.

２） 国立社会保障・人口問題研究所：日本の世帯数の将来推計（全国推計）－2010（平成22）年～2035（平成47）年－，3－7，2013.

３）高尾学区連合町内会編：20年のあゆみ，高尾学区連合町内会，2005.

４）高尾学区連合町内会編：25年のあゆみ，高尾学区連合町内会，2010.

５）地域包括ケア研究会：地域包括ケア研究会報告書～今後の検討のための論点整理～（平成20年度老人保健健康増進等事業）2009.5

６）三菱UFJリサーチ＆コンサルティング：地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書　＜地域包括ケア研究会＞地域包括ケアシステムと地域マネジメント（平成27 年度 老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業）2016.3

７）記念誌編集委員会：高尾小学校校舎改築記念誌　たかお，高尾小学校校舎改築推進委員会，1989.

８）高尾長寿クラブ：平成27年度定期総会要項，2015.